

浄土

1990-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授受承認雜誌) 第三二五号
平成二年九月二十五日印刷 平成二年十月一日発行
第五十六卷 十月号





十月の秀句

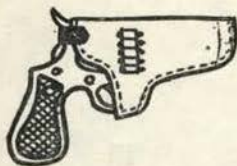
故郷去る秋山に墓一つ増やし
草もやす白き匂ひや野路の秋
落口にしばられてゆく秋の水

伊丹三樹彦

向井治郎

鎌居千代

|| 十月号 ||



また一向専修には、ことに三心を
具すべき也。

——『念仏大意』

目 次

——随想(Ⅱ)——

我見是利 故説此言宮 沢 善 弘.....(2)

《ずいそう②》

「哲学の道」あれこれ.....戸 川 靈 俊.....(9)

《にこにこ法話》

本当の幸せってなあに.....長谷川 岱 潤.....(18)

《四行詩》

柿を食う.....清 川 宗 治.....(26)

新 刊 紹 介

宮沢善弘著『絆(きずな)』.....(28)

季語やぶにらみ (6)

.....木 下 隆 一(31)

残暑の総決算 (1)

◇◇ 連載・話の旅(三) ◇◇

天草に旅して(三)松 浦 行 真.....(40)

表紙絵 小林治郎画

(隨) (想) (Ⅱ)

我見是利故說此言
がーけんぜーりー
 こーせつしーごん



宮沢善弘
みやざわぜんこう

(横須賀市正観寺住職)

この首題は、仏説阿彌陀經から引用した經文です。

浄土教関係の宗侶ならば周知のこの文言ですが、初めてこれを目にされた方、お経のことには詳しくないという一般在家の方、そういう方々のために、この際、多少の説明をいたしましょう。

仏説阿弥陀經（阿弥陀經一卷）というのは無量壽經二卷・觀無量壽經一卷とともに、日本淨土教が依つて立つ正依の經典、法然上人が選定された淨土三部經の一つです。

しかもこのお経は、他の二つと異なり無間自説（弟子の質問をまたず、ほとけの自発的な、直接・一方的説論）のお経なので、般若心經等と同じに、お釈迦様の思想の中心なのだという説さえあるのです。

ところでこの『我見是利 故説此言』（わたしはこの利益を見ている、だからこの言葉を説くのだ）の文について、法然上人がどのように仰せになっていらっしやるのか、これを調べてみると、阿弥陀經釈（法然上人全集二〇四頁上）のご文章の中で、

『……釈迦世尊以自証知見勸進衆生令信念仏往生』（……お釈迦様が、人々に念仏往生を信じさせようとなさって、自証知見をもって、勸めていらっしやるお言葉なのだ）（意訳）

というふうに説明されています。

自証というのは、仏教辭典の説明によると『他の力をかりないで自らの心に証悟すること』とあり、知見とは『意識に留め、目をもって見届けること』であります。

お釈迦様の『我見是利 故説此言』を、私達の言葉で平らたく言い換えると、『私は、

その利益を自身の目で見、自身の意識に留めて、その体験をもとにしてお話しするのだ』
というふうに訳せます。

そうすると、『我見是利 故説此言』は仏教における教化きょう化の基盤となり、自利・利他を
標榜する大乘仏教の実践原理の一つとなります。そうして、無間自説の阿弥陀経はお釈迦
様の思想の中心にくらいするといわれる意味が理解できるのです。

平成二年八月十二日午後九時、NHK総合テレビは「朝鮮戦争・冷戦が生んだ民族分断
……冷戦最後の遺物、38度線」を放送しました。

南・北朝鮮が戦って、押しつ戻しつの激闘が続いた戦況の推移に対処して、時の国連軍
最高司令官のマッカーサー元帥は、強力な中共（現在の中国）義友軍の後ろ楯たもとを擁ようする北側
を排除撲滅し、戦局の決定的な挽回を図ろうとして、原子爆弾使用の許可をトルーマン大
統領に要請しました。

この時の原爆使用計画は二十六発、その投下目標となる二十六の都市は、北朝鮮は勿論
のこと、中国、ソ連にまで及んでいました。

私は、この事実を良く知りませんでしたので、この放送を見て、背筋に寒いものを感じ

ました。

トルーマン大統領はマッカーサー司令官の要請を却下し、彼を総司令官から解任して事の決着をつけました。

大統領のこの選択は正しかったといえましょう。少なくともその時点で、人類世界から原爆の惨禍^{さんか}を遠ざけたのですから……。

朝鮮戦争。これは一九五〇年（昭和二十五年）から一九五三年（昭和二十八年）の休戦協定調印までだと思いますが、この時期は日本が降伏してから未だ五、六年しか経っていない頃です。

正直に言って、被害者である日本人は、敗戦国民なので、未ださしたる発言権が認められず、原爆使用の功罪は、これを使ったから戦争が終わったのだとする戦勝国側の論理のまわりで、『いや使う必要はなかったのだ』とする意見は少数派に属して、その悲惨、その脅威、その破滅の実感^{じつかん}は価値判断の中枢では薄かったと思うのです

不確かな記憶ですが、マッカーサー司令官が要請したことの内容について、当時の一般の認識はどうだったかというと、『原爆使用』ということはあまり知らされていず、『国

境を越えて北の中共軍を攻撃する』という程度のもだったように思うのです。

十二日のテレビで、それが『原爆使用』の可否に関わるものだったこと、なお、その細かな実行計画が提出されていて、それが可否決定の俎上（そじょう）にまで上ぼっていたことが明らかになりました。まことに衝撃というほかに言葉がありません。

トルーマン大統領から来る回答は、イエスカノーか、その時の客観的情勢からは全く五分五分と見えたし、なお、提出者側の観測では、イエスだろうと期待できる判断や考えさえもあつたらしいのです。

トルーマン大統領は、日本への原爆攻撃を承認した大統領です。広島・長崎への再度の使用で、原子爆弾の威力と効果はよく承知していたので、マッカーサー司令官は、恐らく戦略上の必要ということで、原爆使用許可の要請をしたのだと思います。それに対してトルーマン大統領は、総司令官更迭（こうてき）という強行措置を講じてまでも、その要請を拒否しました。その理由はなんであったのでしょうか。このことはトックリと考えてみる価値があります。

今、『戦略上の必要』ということを申しました。戦略は戦術と対比される言葉です。

この二語は、あくまでも相対的です。立場や状況の違いで、どちらにも使い分けができる言葉だと思います。

マッカーサー司令官にとっては戦略上の必要であっても、トルーマン大統領のシベリアン・コントロールの立場からは『戦術上の必要』に過ぎず、原爆の使用は、ある理由のもとで、考えてもおぞましい言語道断の要請だったのかも知れません。

さて、この朝鮮戦争における史実と首題の『我見是利 故説此言』との関係は何か。これは、前にのべたようにトルーマン大統領の拒否の理由を推理すること、この二つは濃厚に関わりを持って来ます。

世界で初めて広島・長崎に原爆が投下されました。その唯一の例証は、何十万人の犠牲者、行方不明者、重・軽傷者が出て、二つの都市が壊滅くわいめつしたのです。

この事実を拭い去ることはできないし、犠牲者や被害者の無量の恨み怨念ねんも絶対に消えるものではありません。

個々の犠牲者や被害者はまことに気の毒という外にないのですが、実はその怨念の存在こそが、以後にもし原子爆弾使用を企てる者がある時は、その当事者の心底を揺さぶり、あるいは恐怖となって突き上げ、その内側からの大きな抑止力になるはずであると思うのです。

神秘主義的なことをいうようですが、これをこそ、かの犠牲者や被害者が究極の悲しみの中から私たちに残した、最高の『ご利益』なのだと思識に留めることが必要だと思ひます。

それができないとするならば、人間にその『おん罰』が下つてもやむをえないのです。かういふ見方をする、最高司令官を更迭してまでも使用拒否を通した時のトルーマン大統領の心情と、それをした本当の理由が見えてくる気がするのです。

この文が皆さんの目に触れる頃、事態がどのように変化しているか、ここでは予想もつきませんが、今のイラク情勢の中に、科学兵器（毒ガス）の使用とか原爆使用という薄ら恐ろしい影が見え隠れしているのはまことに困ったことです。

この度のイラク・クエート情勢でも、双方に適切にシビリアン・コントロールが機能すれば、人間の正しい知恵がはたらけば、きっと良い解決が得られると思うのですが果たしてどうなることでしょう。このコントロールは『双方に適切に』行われなくてはならないので、当事者の中に一人の『ヒトラー』がいてもそれは不可能なのです。

イラク・クエート情勢の帰趨は甚だ気になるところです。

何としても、第三次世界大戦の勃発は阻止しなければならないことなのです。

「哲学の道」あれこれ

とがわ
戸川 霊 俊
れい しゅん

(京都・左京区西住院住職)



京の東山の麓沿いの道に、「哲学の道」と呼ばれている道がある。丁度、琵琶湖

疏水の狭い分流が、南禅寺の裏山とくり抜いた隧道を流れ出たあたり、若王寺神社の前から初まる道である。明治の中期

頃に流れでた分流のゆったりした流れに沿う道である。

京都の河流は、すべて、鴨川も堀川も桂川も、小運河として堀鑿された高瀬川も、そのほか諸々の小川もが、北から南

へと向って流れているが、この琵琶湖疏水の分流だけが、鹿ヶ谷、浄土寺、銀閣寺、白川等の村々とつらねて下鴨の西方で賀茂川に注いでいる。

この分流に沿う全沿岸が「哲学の道」なのではない。

若王寺神社から流れに沿うて、銀閣寺の門前あたりまで、その中間には、宮ノ前という小橋を渡って、更に如意嶽——通称大文字山——の登り口にある臨済宗南禅寺派の尼門跡寺院の靈鑑寺、それに隣りする西山派禅林寺末の有名な住蓮山安楽寺、そしてその北に隣接する浄土律の本山法然院、更に銀閣寺まであたりまでが「哲学の道」と称されるものである。

「哲学の道」という言葉の出処は何であらう。意味するものは何であらう。「哲学する道」か、それとも「哲学者の道」であらうか。

「哲学の道」という道を案内されことによって、末学の徒が哲学概論を単語によって理解させられるいうならば、武蔵野の面影を残す井上円了別墅跡の東京は中野の「哲学堂公園」の方が、それにふさわしい。

今、この京都の「哲学の道」は、近年訪れる人の群は夥しい。京都案内観光雑誌にまで堂々と紹介されているし、更に中高校生の修学旅行の主要見学個所とまで指定されている。まことにこの邦の文運の盛なること、以て瞑すべしということこ

ろか。

「哲学」とは、斯んなものかと理解されて、ただ訳もなく駄弁りながら歩いてゆく。それも近頃の風景であらう。

数年前に、疏水の兩岸の堀されたままの堤が、整然と石で改めて畳まれ、水底が深く川幅が狭く改造されて、身をかがめて水を掬むことすら出来なくなり、疏水沿いの道に敷石が布かれて処々に休憩のベンチすらがおかれるようになり、かつての「哲学の道」の野趣は失われ、これまでの「哲学の道」らしくなくなったのに引替へて市観光局よるに「哲学の道」なる名標が新らしく建てられるに至っては「哲学の道」ファンの失望この上もないものである。

道沿いの桜が美しい。これは大正の初め、画室白沙村荘を営んだ画伯橋本閑雪夫妻が植えたものである。これはこれで、別の意味で「哲学の道」を意味するものであった――。

今年、四月桜の開花期が近づくと、行政は、観桜の行燈を桜の間に吊して花見客を招くための準備にとりかかった。これには、花客を当てこむよりも、「哲学の道」らしきを希う近隣の住民が大きく反対したのであるが、さて、その結果はどうであったであろうか。

「哲学の道」が観光行程となり、「哲学の道」をゆっくり味わうというより、生理欲求現象はトイレの必要がさし迫ってくる。沿道の喫茶店や土物店は元より、

一般の住宅にまで招かれざる客がおしかけてくる。その必要に迫られた行政が建設を予定するのであるが、その個所の選定について、行政と沿道自治会の間での意見が対立して、未だに解決しそうにもない。

「哲学の道」実に学都京都にふさわしい風景で、いつまでもむかしそのままであって欲しいが、今日では、もう、その意味は疾した亡われてしまった感が深いのである。

「哲学」という学問のなかった時代、したがって「哲学」という言葉も無かった頃、この道は、白川のせせらぎを近くに聞く南北に通じる一本の農道に外ならなかった。道の傍には野仏が立ち、道の

次には、瓢箪型の今になつかしい鹿ヶ谷かぼちゃなどが栽培されている野菜畑である。野墓も、三味も――。

折々には、鈴虫松虫の住蓮山安楽寺のお開帳、法然院の広布薩会に詣づる庶民の、時には六阿弥陀順拝に真如堂から永観堂へとたどる善男善女の信心の道であった。

古来、日本に哲学なしと、その著「一年有半」で中江兆尾が喝破しているように、日本に初めて「フィロソフィア」の学を将来し、彼自ら苦辛の結果、これの訳語「哲学」を創ったというか、翻訳して今日にまで至った、その人は西周と云

われる。その伝記によると石見津和野亀

井藩の藩医の子弟として生を亨け、青年にして江戸に入り幕府経営の著書取調所に入り、のち幕命を受けて感臨丸に塔じ、オランダのライデン大学に留学する。その目的は、新らしい時代のための官省の制度・制規の研究であつたが、ふと、通りがかりに耳にしたある講義室の講義室の室義、それがフッセリング教授の「フィロソフィア」の講義であつたとされる。それに非常に関心をそそられて、帰国の際には、多数の、フィロソフィアに関する書物を購求して帰つたといふ。

フィッセリング教授の講義というのは、カントに関するものであつたらし

い。

日本人で、これまでの日本にはめづらしいフィロソフィアの学問に触れた人とは、西周^{フツ}。したがって日本哲学は、この西周が創始ということになる。

明治新政府が、最高学府東京大学を創設するに当って、当然彼も設立委員とされるのであるが。「今後の日本の青年には、これまでこの国になかったフィロソフィアの学こそが至要」として一科を設けることになった時、フィロソフィアを希賢学、窮理学、理学等が考えられたが、それこそ「学をさとり」「学をあきらめる」という意味で、遂に「哲学」と訳名が定められたことは、哲学史の講義で教えられたことである。

彼のオランダライデン大学留学が三十
四才、一八六七年（慶応三年）幕命で慶喜
將軍に侍して京に入った三十九才の時彼
は四条大宮西入、更雀寺に入り、しばらく、私塾を開いたとされる。その時の講
義の内容が何であったか、今私の知るところでないが、若し西洋のソクラテスに
発するフィロソフィアのそれであったと
すれば、日本における「哲学」紹介の最
初の講義ではなかったろうか。もとより
その講義があつたとしても、彼自身は独
創的な哲学理論をもつものでなく、飽く
まで紹介、解説の域を脱しないものであ
つたろう。

更雀寺——俗にすずめ寺と呼ぶ。今は
移転して跡は映画館になっている——。

浄土宗西山禅林寺派である。もしこの
住職に誘われて本山である永観堂禅林寺
を訪れたとしても、後年、このあたりに、彼の生んだ「哲学」の文字を冠した
「道」が生れようとは、よも夢にも想見
しなかったであらう。

西周の願いのように、京都にも、東京
と同じように、近代の最高学府大学が創
設される。

東京から桑木嚴翼、波多野精一、朝永
三十郎、そして金沢の四高から、日本人
で初めての世界的独創的哲学の労作を著
わされた「善の研究」の西田幾多郎博士
が京都の地に入る。このあたりに京都の
哲学的土壌が形成されてくるのではなか
らうか。

明治の後半から大正の初期にかけて、「哲学の道」あたりは、未だ十二分に農村の姿を保っている。そして、吉田神社の森厳な森のあたりから白川道、浄土寺道、静かに流れる白川と疏水分流に囲まれた田園は、大学の学者らしいたたずまいに融ける。

この哲学者達が、時に思索し、時に散歩し、するよすがの道として「哲学する道」「哲学者の道」が生れてくる萌芽となるのではなからうか。

特に、西田幾多郎博士の門下の人達——木村素衛「魂の静かなる時に」に書かれている、いわば、私達の年齢の者の恩師に当る人達——木村素衛、相原信作、下村寅太郎、観山雪州、土井虎賀寿、

伊達四郎と言ったような、所謂京都学派の人たちが、相語り、相論じ、相唱い合って、遣瑤した道として、彼らのかもす雰囲気が「哲学の道」を生んだのではなからうか。

また、旧制高校の年頃の「人生とは？」「哲学とは何か」に目覚める、所謂往年の哲学青年時代の寮歌高吟の気風を養う場としての「哲学の道」の存在価値も認められるのではないだろうか。

その頃の大学の哲学は、殆んどドイツ「観念論の哲学」が主流であった。それ故、ハイデルベルヒやフライブルクにあるようなドイツ哲学者のひそみにならって、日本の哲学の学府の地にも、「哲学の道」の名が生れたのかも知れない。

世に、ドイツ人くらい、職業として「大学教授」を最高に尊ぶ国民はないとされている。そして、カントのような、シュライエルマッハのような、フィヒテ、ハイデガーのようなドイツが世界に誇る大哲学者が、すべて大学総長なり教授であった。

日本も、また、それに劣らない位の大学教授尊敬のことがある——崇敬ではない。それ故、「哲学の道」或いは「哲学の道」がある先生方と関連づけて自然に受容れられて、今日の京の「哲学の道」が存在するのだと思う。

しかし、考えてみると、本来、哲学というものは個人個人別個のものだと思う。多勢で一つの道が定まっているわけ

ではないと思う。「汝の道は汝の道」「我が道は我が道」「汝自らの道を往け」「他をしてその言にまかせよ」である。「哲学の道」が、らしさを失った今日、漸くらしさを今に残しているのは、獄を解かれて、重病を養う日の河上肇がうたった賦の法然院のたたずまいである。

絶えて人影と見ず

時に幽禽の窺うあり

春雨椿自ら落ち

秋風梟独り哭しむ

酷愛す物情の静かなるを

斯地希くは屍を埋めむ

◎維持会員へのご加入のお願い

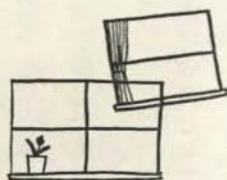
法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

にこにこ法話

本当の幸せてなあに



はせがわ たいじゅん
長谷川 岱潤
(東京・品川区戒法寺住職)

「おかあさん、歯が痛くてしょうがないよ」

「どれ、見せてごらん」

「右の下の奥のほう」

「こりゃ虫歯だね、歯の後ろが真っ黒くなっ

ているよ、歯医者さんに行かなくちゃね」

「あそこの歯医者さん嫌だ。この間すごくつ
っけんどんだったんだよ」

「そうね、あそこ、先生も変わっちゃったみ

「たいだし、あまり感じよくないわね」

「でしよう。やだな」

「今度スーパ一の二階に新しくできた歯医者さん、この間おかあさんが行ったら、とても感じよかったわよ。とてもきれいな歯医者さんでね、機械も新しいし、先生も優しい人だし、それでまだ空いてるもの。おかあさんも今日行こうと思っていたから、後で一緒に行かない」

「じゃあ、そうしてみようかな」

「そうしなさいよ」

「よかった。じゃあ宿題やっているから声かけてね」

ミーちゃんとおかあさんは歯医者さんに行きました。ミーちゃんの想像以上にきれいな歯医者さんで、それにとっても優しい先生で

した。

「少し甘いものの食べ過ぎじゃないかな、食べたらずう歯をしつかり磨かなくちゃだめですよ、今度歯の磨き方の練習をしましょうね」

ミーちゃんは小さくうなずいたものの、治療はやっぱり痛くて、とても辛かったです。帰り道ミーちゃんはおかあさんに言いました。「歯医者さんに来るぐらいなら、わたし甘いもの、もう食べない」

「ええ、ほんと。さっき、おばさんからいただいたケーキどうしました。お父さんに二個食べてもらえばいいか」

「ええ、何、その話、今言った話はそのケーキ食べてからにするわよ」

「大丈夫よ、お父さん二個ぐらい食べられるから、せっかく決めたのだから、そうしたほ

うが いいわよ」

「おかあさんの意地悪」

ミーちゃんはブーブー言いながら歩いていました。

「ねえ、おかあさん見て、隣のお寺の掲示板

『美容院は一日の幸せ

結婚は一週間の幸せ

新車は一月の幸せ

新築は一年の幸せ』

笑っちゃうわね」

「へえ、誰の言葉かしらねえ」

「お父さんに教えてあげようよ」

「そうね、こういう言葉好きだからね。どう思うか楽しみね」

ミーちゃんも急に明るくなって、家に入っ
てゆきました。

「お父さん、隣のお寺の掲示板見た。おもしろいよ。まだだったら見てきてごらん」

「ああ、朝見て知ってるよ。結婚は一週間の幸せってやつでしょ」

「そこばっか覚えてる」

おかあさんが唇をとんがらせて言いました。

「誰の言葉だろうね」

お父さんは、おかあさんを見無視して、話を続けました。

「あの四句だけで終わっているから、考えさせるんだろうね」

「笑えるだけじゃないの」

「でも、極端すぎますよね、他の三つはまあ言えているような気もしますけどね」

「おかあさんは、結婚は一週間に大分こだわっているようだね。そんなにまじめに考えな

いで、一つのジョークなんだから、『結婚は墓場』と言う言葉と同じに考えればいいんじゃない」

「大人の言うことは分からないわ」

「ミーちゃんならどういうふうに言う」

「そうねえ、

『日曜は一日の幸せ

連休は二日の幸せ

冬休みは二週間の幸せ

夏休みは一か月の幸せ』

こんなところかな」

「うまいな、決まったじゃない」

「ただ休みあげただけじゃない」

「おかあさんはうるさいな」

「もめないで、さっきのケーキ食べようよ」

「ミーちゃんは甘いもの食べないそうよ」

「もう、意地悪なんだから。食べます」

「だって歯医者さん行きたくないんでしょ」

「ちゃんと歯を磨けば大丈夫だって、歯医者さんも言ってたよ」

「そうそう、この間ね『タルムード』というユダヤ教の聖書をめくっていたら、こういう言葉があったよ。『医者忠告を聞いていれば、医者に金を払う必要はない』言えてるでしょ」

「そうだよ。ちゃんと歯を磨いていればいいんでしょ。大丈夫だよ」

「ちゃんと、三度三度できるの」

「あ、それからタルムードにはこんな言葉もあるんだ。」

『賢人の前に座る人間は三つに分けられる
スポンジ型——何でも吸収する

トンネル型——右の耳から左の耳に抜けるだけ

フルイ型——大切なものとそうでないものを選別する』

ミーちゃんはどれだろう」

「お父さんは横から、ちゃちゃ入れしないで下さいよ」

「ごめんね、でもそう向きになるなよ」

「そうじゃなくて、ミーちゃんの自覚を聞いているんです」

「しっかりと三度三度磨こうと思っています」

それから、お父さんの話だけど、私スポンジ型だと思うよ。何でも知りたいもの」

「そうか、それもいいかもしれないけど、お父さんはちょっと危険性を感じるな。いい話は、今の歯を磨く話なんかも、実行しなくて

は意味がないでしょ。どんな知識も、自分の中で消化して、いいことは実行する。いい話は人に伝えるなど、他の人との交わりの中で活かさなければ、何にも価値がないことだと思うんだ」

「じゃあ、何型がいいの」

「実行できることには限度があるからね、お父さんはフルイ型人間になってほしいんだ。ただそのフルイにかける基準を間違わないでほしい。自分自身の利潤や、狭義な正義感はやめてもらいたいんだ。あくまでも仏様の目でフルイにかけてほしいと思っているよ」

「難しくて分からないわよ」

「そうか、いいこととかいい話などというのは、何のためにかと言ったら、健康で幸せになるためにだよ。だったらほら、さっきの

話し、美容院は一日の幸せの意味だよ」

「幸せって、虚しいものっていう意味なの」

「違う、そういうものに幸せを託すと、虚しくなるという意味なの」

「幸せが持続しないってこと」

「そう、そういうものは私たちが本当に求めなくてはならない幸せではなく、快楽に過ぎないということ」

「本当の幸せは別にあるということ」

「そう、我々の欲望を満たそうとするところには、本当の幸せはやって来ないということ」

「じゃあ、どうしたらそれは得られるの」

「我々の生き方、我々の見方を変えなくてはだめだと、仏様は言っているよ。あ、そうだ。インドにこんな民話があるって、ひろさちや

先生の本に出ていたよ、

『九十九頭の牛を所有している金持ちがいた。しかし彼は不満であった。あと一頭で百頭である。彼は自分の牛が百頭でないことを悲しんでいた。そこでこの金持ちは、わざわざボロを着て、遠くに住んでいる友人の家を訪ねてゆく。友人はそれほど裕福ではなかったが、一頭の牛を持っていた。

金持ちは言った。「おまえはいいなあ、わしは貧乏だ、食べるものに困っている。女房、子供を養っていけそうにない。おまえは牛を一頭持っている、おまえがうらやましい」と。それが嘘であるとは知らず、友人は顔を曇らせながら言った。「そうか、知らぬこととは言え悪いことをした。あなたがそんなに困っているなら私の牛を差し上げよう。私は牛がなくても生きてゆける。友情のためにこの牛

を持って帰ってくれ」

金持ちは、内心では舌を出しながら、感謝の言葉を言って牛を貰って帰った。かくて金持ちの牛は百頭になった。彼はその日幸福であつた。一方友人のほうも幸福であつた。友達の窮状を救えた喜びに、彼は幸福を味わっていた。さてどちらの幸福が本物でしようか』こんな形で民話は終わっているそうなんだ。ミーちゃんは思う」

「これってこの間の布施の話と同じだよ。だから、一頭の牛を与えた人のほうがずっと幸せでいられるってことなんですよ」

「ひろ先生はこんなふうに言っているよ。」

『金持ちは翌日こう考えるだろう。「私は百頭しか持っていない。是非とも二百頭欲しい。百頭足りない」つまり永遠の飢餓状況。」

それに引き換え一頭の牛を施した友人の幸福は、きつといつまでも続くであろう。彼は欲望の奴隷になつていないから』

お父さんもまったくそう思う。人間というのは欲し、貪るとき不幸になり、与え、施すとき幸せになる。このことがどんな時にも言える真理だと思うんだ。このことを基準にしてフルイをかける人間になつてほしいんだ」

「自己中心はいけないと言うことね」

「そう、常に回りを見ながら自分の行動を決めてほしいんだ。歯だって、悪くなって食べられなくなったら、ミーちゃんも辛いけど、おかあさんも苦勞するんだからね、しっかり磨いてよ」

「そうだね、だからケーキ食べて、歯を磨くことにするわ。いただきます」

◇◇ 平成三年用新版 ◇◇

浄 土 宝 暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鐵仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ページ以上 特価60円)

送料実費 (300ページ以上はサービスします)

〰〰〰 お申込み 〰〰〰

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法 然 上 人 鐵 仰 会

(振替) 東京 8-82187

四

行

詩

柿を食う

屋根の上で並んで食べた
秋の味を食べた
夕焼けと同じ色の甘柿
父と私の影が長かった

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ

(詩人)



◇ ◇ ◇ 好評新刊 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ A5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇一 東京都千代田区隼町三一―

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一二七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

宮沢 善弘 著 『絆(ぎずな)』

本誌巻頭随想をお寄せ頂いている宮沢善弘師が、今春出版されたのが本書である。A5判、三〇九ページ、小冊子とはいいがたい労作である。

一言でいえば、本書は著者の体験的記録である。もうすでに半世紀近くも過ぎてしまった、あの太平洋戦争、すなわち今次第二次世界大戦を出陣し、従軍し、俘虜の体験をされた、著者宮沢師の思い

出の記でもある。しかし単なる回顧記でない。そのことをここに筆記するだけでは理解して頂けないかもしれないが、一応の紹介を試みよう。

「無尽の業」「見えぬ敵」「地の虫」「俘囚の記」と続く四部構成、全十八話の思い出の挿話集が、本書の構格である。第一話「シラミ」にはじまって、「教官」「出陣の譜」「シベリアへの道」「白樺の

監舎にて」などの各話のタイトルを眺めても、内容を類推する手掛かりとはなろう。

しかしこれでは著者の思いを充分に伝えることにはならない。本書は、往時を追慕しながら、資料を渉猟精査した刻明な記述と共に、頭注など細かく配した体裁である。加えて、「第二次世界大戦進行の主要メモ」「北支那歩兵下士官候補者隊の沿革」などの巻末付録も得難い貴重な参考資料である。文章の運び自体が厳密な上に、瑣事にも心を留めて正確を期すという著者の心構え、心配りにも敬服する。

しかしこれだけではない。「私か『身に纏って』念仏信仰の道を歩む、その『纏う』ものとは何か」という問い掛けと共にじまった本書の執筆の意図とは、それが絆(きずな)である。「序にかえて——戦争に関わりし世の限なき罪業を顧みて」と記されてから「懺悔文」を冒頭にまず掲げられた著者の心は、人々との絆ということを思い起こす、思いたすことであつたろう。そのことを、本書本文の内容と本書出版の体裁がよく物語っているように思われる。文中「閑話休題」として挿入された十篇の短文は、これはまた著者の本音でもあろう。

最新好評のトラクト

竹中 信 常 著

佛 心 凡 情

ポケット版二四六頁
イラスト入り

佛さまの心で現代の世相を思い、これを凡人のわれわれに分りやすく説いた文集。法話の材料または施本としてご利用下さい。

定価 五〇〇円 下料 二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六
電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)一―八二四七

季語やぶにらみ (六)

残暑の総決算草 (1)

木下隆一

(随筆家)

いままでも手紙の書き出しに「残暑の候、いかがお過ごしですか」などと書いたことはあったが、多分に儀礼的な言辞で、それほど

実感はなかった。残暑と言っても、例年のように八月半ばを過ぎれば収まるだろうと高をくくっていたのが間違いで、今年の残暑は九

月半ばまで尾を引いた。何しろ東京では、八月中に真夏日が二十七日もあったというのだから、異常もいいところである。

真夏日とは、日中の温度が一瞬でも三十度を超えると、こう呼ぶらしい。いつ、誰が言い出して一般化したのか知らないが、不思議な言葉ではある。そして、それに対応して、夜間の温度が瞬間的に二十五度を超えた場合を、熱帯夜というのだそうだ。真夏日はともかく、熱帯夜の方は語感が魅力的だから、俳句の季語として定着しそうな気がする。

雨が少なかったのも、今年の夏の特徴であった。梅雨入りした六月九日に豪雨が降った後、梅雨の期間中にほとんど雨はなく、七月十八日、うやむやに梅雨明け宣言が出された後も、八月十日、台風十一号に直撃されるま

で、いやその後もずっと、局地的な夕立を除けば、伊豆半島は雨の恩恵に浴さなかったのである。

そんな訳で、自然界にも数々の異変が見られた。空梅雨のせいか、紫陽花の花は小さく、つきも悪かった。花卉に似た萼片は端から茶色に変色し、ドライフラワー化するのに、それほど日数を要しなかった。ちりちりと日に焼かれ、焦げたように枯れてゆくのを見るに忍びず、花の終わりを待たずに次々に切ってしまったが、八月半ばに返り咲いた白花は、数は少なかったが長持ちして、

紫陽花に秋冷いたる信濃かな

杉田久女

の句を思い出したりしたものだ。初夏

の花忍冬も^{ハナニシキ}返り咲きして、あちこちで長い間咲き続けていたし、今年初めて花をつけた金柑は、何を思ったのか二か月も経たないうちに返り咲きして、今では小さい実をつけている。ところが、これが黄金の実に生長するという保証はどこにもない。いろいろな花が返り咲きした陰には、八月の中旬に植物の意識を攪乱する何らかの衝撃が走ったのであろうが、それが何であったかは、神のみぞ知る、である。

犬が葉を好んで食べるイネ科の一年草、オヒジワ（通称相撲草）が異常発生したのも、今夏の特徴の一つであった。梅雨の前に手入れにきた植木屋が、
「除草剤撒いときます。これで草の生え方が大分違うと思う」

と、顆粒状の物と、液剤を噴霧器でシュウシュウやって帰って行ったが、効果は全くなかった。

「きつと、顆粒状のは相撲草の種で、シュウシュウやったのは栄養剤だったんだな」

と、九月の末に庭を見にきた植木屋に言う
と、

「ここだけじゃない。あっちでもこっちでも苦情言われて困ってますよ。何でこんなことになったのかねえ」

と、真顔で答えた。「ばれたか、ワッハッハ」とでも受けてくれれば楽なのだが、洒落の通じない人と話すのは疲れる。

「土地が荒れる前兆かもしれんよ。休耕田なんかも、まずこの手の草が生えてくると言うから……」

「地震の前触れかね？」

「一瞬、植木屋の目に怯えが走った。」

「まあ、そうならないことを祈るがね」

植木屋の発想の飛躍にはこちらが驚いたが、案外正鵠を射ているような気がしないでもなかった。

昆虫の世界でも、今年は異変があった。カブトムシの飛来は年々減っているが、今夏の収穫は僅かに雄二匹雌二匹。数年前には明け方家を一回りすると毎朝五匹や六匹は捕れたものだったが……。しばらく籠に入れて飼っているうちに雌は逃げてしまったが、雄は二匹とも一か月以上も生きていた。遊びに来た友人の孫に進呈したので、その後どのくらい

生きのびたか知る由もないが、「雌がいないと争うこととしないから、雄は長生きするんだなあ」と言った友人の言葉が印象的だった。カミキリムシに至っては、姿を見ず、稀有の事也、と句帳にメモされている。餌になる木が伐り尽くされた訳ではないだろうに。

例年の如く、^{ヒメシジミ}蛸が伊豆半島東海岸の初蟬であることに変わりはなく、今年は七月七日が初鳴きで、ミンミンゼミは七月二十八日であった。ミンミンゼミに前後して、アブラゼミとクマゼミも鳴き出したから、空梅雨や早に関係なく、蟬の発生は順調だったようである。蛸は立秋のころ、ツクツクボウシと入れ替わるように消えて行った。これもまた例年通りであった。蛸は夏の蟬なのに、歳時記では秋の部に入れているのが、私には解せ

ない。

蛸を秋鳴く虫の仲間に仕立てたのは、「枕

草子」第四十段の「虫は、鈴虫。茅蛸。蝶。

松虫。蟋蟀。促織。われから。ひを虫。螢。

蓑虫。云々」辺りが原典と考えられるが、だ

とすると、清少納言も罪なことをしたものだ。

もっとも、清少納言に言わせれば、蓑虫を引

き出すために、虫の名を思いつくままに書い

たまでのごとで、「鳴こが鳴くまいが、そ

んなこと私には関係ないね。そうでなきゃ

『われから』なんて、海に棲む節足動物の名

を書く訳ないだろ。ただ親に捨てられたミノ

ガの幼虫が、秋風の吹くころ迎えに来ると言

った親の言葉を信じて、秋風に揺れながら

『父よ父よ』と呼んでいるのは大変哀れだと

言いたかったのさ」ということになるのかも

しれない。

困るのは、これらの虫の名がすべて和歌の

題となり、連歌に受け継がれ、いまでも俳句歳

時記に麗々しくその名を連ねていることであ

る。ちなみに「ひを虫」はカゲロウ。そして、

ここで言う「鈴虫」は現在のマツムシで、

「松虫」は今のスズムシであるという。更に

「蟋蟀」はコオロギである。「促織」はバッ

タのことというから、話はややこしくなる。

歳時記等の解説では、専ら「枕草子」の記述

を拠る所にして、蛸を秋の部に入れたと苦し

い言い訳をしているが、このような事実在即

さない説はさっさと撤回して、夏の部に編入

するくらいの勇気を歳時記の編者は持つべき

で、その方がよほどすっきりする。

ニイニイゼミを捕らえたのも、この夏の収

獲であつた。この蟬は、私が育つた瀬戸内の沿岸では、夏蟬のトップを切つて登場する。しかし、私は東京でも伊豆でも、この蟬を見たこともなければ鳴き声すら聞いていないのである。チイチイと細々と鳴くので、聞き逃がしたと考えられなくもないが、姿を見せないで、いつかその存在を忘れてしまつてゐた。それが偶然にも捕らえることができたのだから奇跡と言わねばならぬだろう。ブンと翅音がしたかと思うと、ぶつつかるように髪にとまつたのである。何か分からなかつたが、反射的に手が出て押えると、それが何十年振りかでお目にかかるニイニイゼミであつた。ただ物足りなかつたのは、それが雌だつたことだ。やはり蟬は鳴かなければ価値は半減する。

へ運の悪い奴だな、お前は。俺にぶつつからなければ、ぶつつかつてとまらなければ、広い山野で短い一生を自由に振る舞えたものを……つくづくと蟬の顔を眺めているうちに、珍しく蟬の句が頭に浮かんた。蟬とか蜻蛉といった昆虫は、私の最も苦手とする季語にも拘わらず、素直に浮かんできたのには、私が一番驚いたといつていいだろう。

蟬鳴いて我が身八方塞がりにもう鳴かずともよし蟬よ風生れぬ
寛げば夜も蟬鳴く伊豆の宿
横這ひに蟬幹めぐり鳴き止まず
虫籠に蟬一匹やそれも啞

しかし、最後の一句で壁に突き当たると、

もう後が続かなかった。「啞」の一語が壁になったのである。何年前になるか、何がきっかけでそんなことになったのか忘れたが、放送局に勤めていた時分、人体の不具を表現する語の使用は慎重に、というお触れが出て、「盲」は目の不自由な人という風に言い換えを求められ、「じゃあ、盲縞ってのは目の不自由な縞って言うのか?」「盲減法はやみくもと言い換えるにしても、盲、蛇に怖じず、盲千人目明き千人なんて慣用句は使えなくなるのか?」などとワイワイやった記憶が甦ったのである。「啞」も当然その範疇に属しているはずである。

蟬を有り合わせの紙袋にとじこめると、念のために私は「朝日新聞の漢字用語辞典」(朝日新聞社刊)と、新聞用語懇談会編の「新

聞用語集」(日本新聞協会刊)に当たってみた。どちらも新聞の表記に関する手引書だから、明らかに使用禁止をうたっていないくても、ヒントぐらいは得られるのではと思ったのである。なぜ、私が「啞」にこだわるかというと、自分で言うのもおかしいが、この句が好きで、捨て難かったのである。

二つの参考書からは、あまり得るところはなかった。人体の不具を表現する文字は、常用漢字ではないからというのを理由に、新聞社自体がその使用を極力避けているから紙面に現れることは少ないが、出るとすれば慣用語で熟語として音読みにしたり、ルビを振ったりして、巧みに差別語追及の鋒先をかわしている。「盲」を例にとれば、盲目、盲愛、盲従、盲点、文盲、盲導犬などがそれで、

「メクラ、メシヒ(イ)」という訓読みはない。「啞」も啞然、聾啞、盲啞といった熟語で僅かに命脈を保っているが、仮名書きが要求されていいる。しかし、「ろうあ」と書かれたのを見ると、本来の意味を立ち所に理解できる人が何人いるだろうか。そのくせ、「漢字は一字一字それぞれ意味を持つ表意文字です」と学校で教えているのだから、あ然として開いた口がふさがらない。

へオシという訓は今や完全に抹殺されてしまったんだな——蟬を逃がしてやりながら、多少哀惜の念をこめて「虫籠に蟬一匹やそれも啞」と呟いて、この句を私の意識の中から抹殺した。

(この項続く)

『仏事と信仰生活・浄土宗』

宮林雄彦 編

● B 6 版並製

● 百四十二頁

● 定価八百円(送料二〇〇円)

「教え・しきたり

行事の解説書」

◎本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

発行発売 群

書

電話東京 (03) 917-8411

〒170 東京都豊島区巣鴨4-7-6-403

振替口座 東京7-168759

発 売 続群書類従完成会

電話東京 (03) 915-5627

〒170 東京都豊島区北大塚1-14-6

書店でも注文できます。

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』十月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

☆☆

話
の
旅
(三)

天
草
に
旅
し
て
(三)

— 故・三宅春光師の生活と意見 —

まつ
うらぎよう
しん
松 浦 行 真

(浄土宗出版室長)

三宅春光上人の檀信徒葬による表葬は
八月二十三日、自坊である牛深の無量寺
で執行された。

ご導師は京都からおこしになった、浄
土門主にして総本山知恩院のご門跡であ
られる藤井実応猊下である。

島はその前日、台風が過ぎ去ったばかりでまだ細雨が残っていたが、本堂はもちろん、境内にも高いブルーの天幕が張られて、その下にならべた椅子にも檀信徒の方々がぎっしりとつめかけて、近來まれにみる盛儀であった。それはそのまま、春光和尚のお徳を映しているかのようだった。

その盛儀を、本堂の向かって右側の鴨居の上にかかげられた写真の吉水良祐上人が、見おろしていた。わずか二カ月ほどまえ、春光上人その人が筆者を案内し、その前に立って説明してくださった写真である。読経を耳にしつつ、筆者また感慨なきをえなかったのは当然であろう。

その前夜を、大田秀三宗務総長をはじめ、春光上人の後任者である野呂幸進宗会議長や一宗の役員の方々とともに、筆者はご遺族の配慮による加世浦の楽々苑ですごした。三宅家とはゆかりのある旅館で、故人もよく足を運んだところと聞いた。

二カ月前の無量寺訪問のさいにも、私は夜ここで接待にあずかり、春光上人やそのご子息で無量寺の現住職・亮逸師から、よもやまの話をうかがったものだった。一夜明けて、縁側から見下ろす露につつまれた東シナ海の風情ある眺めが、またよかった。早朝、大洋へ出漁する漁船のディーゼルの音が、まだ耳にも残っていた。

生前、春光和尚は社会福祉法人「明照園」の理事長であった。この法人は養護

と特別養護という二種の老人ホームを併設する同名の「明照園」のほか、救護施設「天草園」と保育施設「久玉保育所」の四施設をさん下におさめていた。春光上人が太っ腹で果断な宗教家であったことを知る人は多いが、社会事業家としての半面を知る人は少ない。

迂闊^{うかつ}にも、筆者もその一人であった。

一つには、天草という遠隔地での経営であったことが、人口にのぼる機会を少なくさせたせいかもしれないが、寺務に宗教という職務が加われれば、ちょっとした仕事の事に手はだしくいのではないかという思い入れが、筆者にはあった。

それに答えて、春光師が語った。

「ただお経を読んだだけかと言われる一生よりも、仕事も残す、これも和尚の生き方だと思ったんですよ。そこで、時代に処するためには何がいいかと考えて、この事業を始めた。天草の人とも一体になれるしね。けれども出家でこうした仕事を一人占めにしてはよくないから、まあ無量寺と同じように牛深を二分しとるような真宗の本寺があるから、その和尚に『あんた、やらんかね』と言ったら『いや、わしはそんな苦労はもうええ』と言うので、『あんたがせんのなら、私がやりましょうかな』と、檀信徒の賛成と協力を得て始めたわけですよ。ま、たしかに最初は苦労じやった」

その苦勞話を、亮逸師が引き取った。

「いまは福祉施設を一つ作ろうとする
と、かならず国庫資金がつきます。四分
の三が国の補助ですよ。しかし親父がや
ろうと決めた昭和三十年代の初期にはそ
んな制度はなかった。補助は三十八年か
らです。だからみんな自己資金——天草
中、托鉢に歩いたですよ。首から頭陀袋
下げ、草鞋ばきで行脚して、お米をいた
だきました」

「これはもう、坊さんの原点ですね」
と私。

「いい修行になりました。ぼくは大学二
年の時から歩きましたから」

と亮逸さん。

「もちろん協力してくださる人もいまし

たよ。末寺八カ寺のメンバーもみんな参
加してくれましたね。ちがう地域はそ
このお寺が浄財集めに協力してくれて
……」

「全部でどれくらいになりましたか」

「昭和三十四年ころのおカネで七十万く
らいをいただきました。時価にしますと
一千五百万円くらいになるでしょうか」

「たいしたもんですね」

「もちろん全額じゃないですけど、基金
の一部に……。だから創設の頃は非常に
苦勞しているんです。いまは福祉施設と
いうと、都市銀行でも向こうのほうから
カネ持ってくるけれど、当時はまったく
の徒手空拳ですからね。いま考えれば冒
険ですよ」

しかしそれは、成就へむけての心理的な
 気迫につながっていったにちがいない。

「牛深養老院」のちの老人ホーム「明
 照園」は昭和三十四年に発足した。しか
 し建物が老朽化し、檀徒の戸村^{とむら}知造^{ちぞう}さん
 から土地の寄進を得て五十三年に、現在
 の地に鉄筋コンクリートの新しい老人ホ
 ームを完成させた。さらにその背後に大
 きな一棟が新築されて、特別養護老人ホ
 ームが発足したのは六十二年のことであ
 る。

楽々苑に行くのに先立ち、梅雨の晴れ
 間のやわらかい日差しがさす午後、亮逸
 さんの案内で明照園内を見学した。私が
 何よりもびっくりしたのは、現代の老人

ホームには暗さがなく、また設備的に
 は、寝たきり老人が寝たまま入浴できる
 浴槽があり、さらには自家発電まで装備
 しているということであった。

もっともこういうことに驚くのは、私
 のこの分野における無知のせいかもしれない。
 社会事業は社会福祉と呼び名が変
 わり、慈善的な色彩は払拭されて、人間
 が当然受けるべき権利という考え方に変
 わりつつあるのであろう。実際こうした
 設備の利用を、在宅老人の介護にまで及
 ぼそうという計画は、すでに一部が実行
 に移されているということである。

亮逸さんによれば、この考え方はさら
 に進んで、やがて施設自身がヘルパー
 を、在宅介護の老人のもとに派遣するよ

うになるだろうという。老齡化社会の進
行とあいまって、福祉思想もまたしど
し進行しているのである。この印象は、
私には強烈だった。

見学中の私は、おじいさんとおばあさ
んが親しそうに会話を楽しんでいる光景
をかいま見て、かつて「老いらくの恋」
という流行語があつたことを、ふと思い
出した。そのことを尋ねると、明照園の
ことではなかったけれど、いろんな話を
してくださつた。

例えばその一つに、こういうのがあつ
た。

その人は誰が見ても、「ああ、いいお
ばあちゃんだな」と思ってしまうような
老女だそうだが、いつも誰か一人、憧れ

の男性を「設定」しないではいられない
ひとなのだそうである。思い焦がれるこ
とが、生の充実に通じているらしい。

だからほかのおばあちゃんがその男性
と話していろいろものなら大変で、

「いまあの人、あの男性にいちやいち
やしている。そのことをラジオがいま言
つてるでしょ。はやくNHKに電話して
やめさせて下さい」

と、真剣な顔で職員に訴える。

つまるところその老婦人は、妄想とい
うか、自分自身が作つた幻想のなかで、
独り芝居を演じているのである。そのこ
と以外はまったく正常で、非の打ちどこ
ろの一点もない人だという。

こうなると、人間っていったい何なの

だろうと、私なんかは考えてしまう。

おそらく人間というのは、幾つになってもある特定の人を愛する、もしくは、好きになるという行為を、捨てきれない生き物なのかもしれない。反面にはまた、“嫌悪”ということも存在するはずだ。その二つをないまぜながら、人は生のあるかぎり、ときには美しい花を咲かせ、ときには醜い悪臭を放ち続けて、ゆくのであろう。

それはともかく、福祉への考え方がこう進むと、経営も一筋縄ではすまないであらう。亮逸さんも、

「どうしても医者が、必要になってくるんですよ。いまは嘱託の開業医ですが、これでは無理で、勤務医が必要になって

くる」

「おおごとですよ、それは」

「ですから私の末っ子を医者に養成したいと思って。兄は坊さんになりますから。この青写真が実現したら、私は施設から引退して、お寺のほうに力をいれたい、それがぼくの理想なんですよ」

あとを、春光上人が引き取った。

「まあ私はね、苦勞のしがいがあったと思ってます。保育園も当時は、並み大抵じゃなかったですよ。家内から、『あなたは宗会に行きやあそれでいいが、あとに残ったものはどんなに苦勞したか』とよく言われたもんです。けれども子供も孫もね、今では生き甲斐を感じてやってくれている。議員の後継ぎはいらんので

す。しかし施設には後継ぎがいる。あとは子供がうまくやってくれんといかん。それで長男はどうする、次男は三男はと、万全の策をとりつつやっておる、社会のためになるようにと。

まあ私ら、幸いなことに生活費はお寺のほうから恵んで貰ってますからな。月給ではどうにもならん一面もある。その点は有り難いことです。これも開山人歴代人、檀家のおかげですよ。だから私はいつ死んでもいいという心境ですよ」

テープを聞きつつここにきて、これは一種の暗合かと、私はふと胸をつかれた。同時にそれはまた今回の取材行の結論ともなっていた。

しばらく会話がとぎれて、静かなひとときがあたりを領した。東シナ海の漁から帰ってくる船のエンジンの音が、ひときわ高く聞こえた。亮逸さんが言った。「きょうは満月だから、船が帰ってきよる。――月夜はイワシも獲れないんですよ」

しばらく間を置いて、春光和尚がまたぼつんと言った。

「そうかね。きょうは月夜だったのかね」

しかし海には霧がかかっていて、私には月は見えなかった。

(この項おわり)

◆ ◆ ◆ 新購読会員のご紹介を ◆ ◆ ◆

月刊誌『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にも遺漏が多く、また校正のミスも相変らずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後も少しづつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上なにかをお願いもできないことはありませんが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げる次第です。なにを隠しましょう、一ページ、ポツカリあいた埋草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六、十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 十月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年九月二十五日 印刷

平成二年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

△日本図書館協会選定図書▽

『江戸物語』

細田隆善△豊明▽著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本が好評重刷——

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録／定価一八〇〇円

【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

江戸は全国総城下町

江戸は世界一の人口

江戸は日本の縮図

江戸で日本の富の半ばが消費

江戸文化の出現

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話(〇三)二六九―一二九三 二六七―六六三七
振替(東京)七―一一〇九三／千一六二